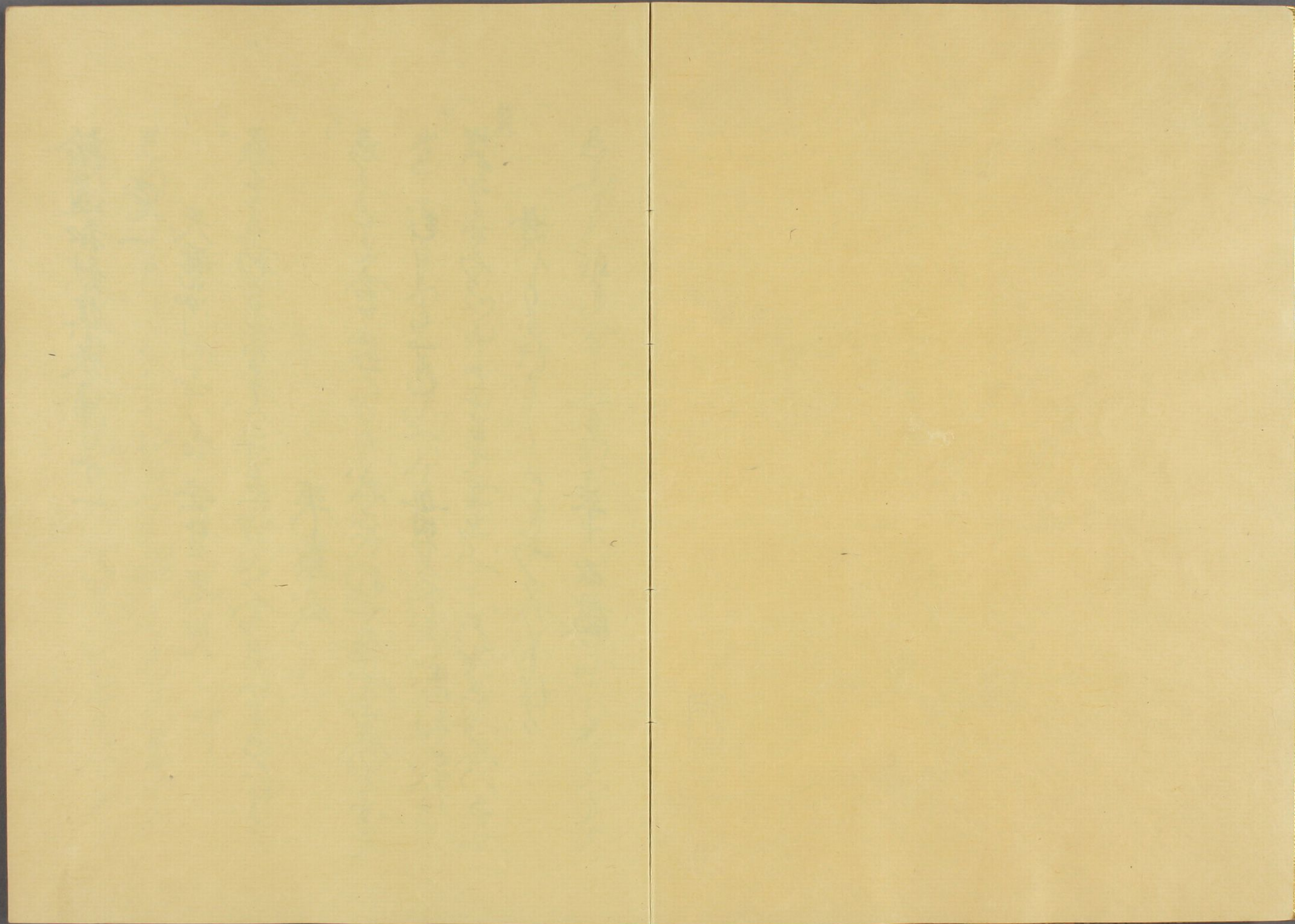


拾遺和歌集下



石渠



拾遺和歌集卷第十一

恋一

天曆沖時奇命 壬生忠見

<sup>カエ</sup>恋とてふわらふもさしきふり念まひそさしはら

平兼盛

<sup>カエ</sup>思ふことよおひかり我恋物やふとく人のふそ

恋しらす

貫之

<sup>カエ</sup>夕夕つらりとそめはばふらうとさうふふふ

女乃りいひいめつらうけり

平公誠

思ふこと雅ゆかぬのほどいふふふ君よそ人

恋しらす

よみ人不知

<sup>カエ</sup>歎くおまらつおふこもそ出ぬさいぬとのさうそあ

そことまらそとのめいあふあははらよあひぬあ

そことまらよらよはらぬのみ〇と恋ふそあわ

人麿

<sup>カエ</sup>あまふまは八重雲うらけり秋のそこのさういふ海

よみ人不知

見ぬ人の恋ことわあそおやうれ雅とらとらんあふ

あふらそ恋ことみそあつあつあつあつあつあつあ

角てのこわりそはくは漢子もよそにうつゝ意やとて  
よそにうつゝいひのくれあ井は意つゝ花のよそ  
まゝいぬうしすめふいひぬぬめつけ侍後  
よつけの時  
権中納之敷忠

身めそよふのこふまにいぬふもよそわおふら  
侍後よつけの時よはへめしてけりけり  
くふまのい

後撰

いそふよそせそいひいそよとよふのよよいす  
権中納之敷忠  
いそふのいふよとよいひいそよとよふのよよいす

葉子孫心平章明教王母

けいんの中納之敷  
小野宮を政大臣

あふきいふふとあふけいんえうとよそよとて  
返

けいんの中納之敷  
よみむとてい

湊出つあまのれを舟にいりあふらよとて意とてあ  
不舟川とていこのいされあみあしおんを乗る

人中

水底よけつ玉藻ふらふいひとよそいふら  
あふ

よみ人しらす

おまのこまきつる君と命をいかにしめあはせよ  
いふせん命らりあらわりのこまきつる君と命をいかにしめあはせ

おのこに男とよみしらすいかにしめあはせ

おまのこまきつる君と命をいかにしめあはせ

おまのこまきつる君と命をいかにしめあはせ

おまのこまきつる君と命をいかにしめあはせ

おまのこまきつる君と命をいかにしめあはせ

おまのこまきつる君と命をいかにしめあはせ

おまのこまきつる君と命をいかにしめあはせ

おまのこまきつる君と命をいかにしめあはせ  
おまのこまきつる君と命をいかにしめあはせ  
おまのこまきつる君と命をいかにしめあはせ  
おまのこまきつる君と命をいかにしめあはせ

九條右大臣 孝平公作

よみ人しらす

おまのこまきつる君と命をいかにしめあはせ  
おまのこまきつる君と命をいかにしめあはせ  
おまのこまきつる君と命をいかにしめあはせ  
おまのこまきつる君と命をいかにしめあはせ

おまのこまきつる君と命をいかにしめあはせ

返一

中務

けりあけ消わら書いひしほ月とつそとそと夜と魚いあ  
むしーらす  
よみ人不知

よそあけあひぬけふ意かひゆよふあう命さ  
いそとらわつ意やまむらるあさまけの松たき

大原野条の目らうあよこして女けりといつ  
らひとそ  
一條栲政

大原の祢とあふらんう意いき氏人のうらや  
返一  
よそとてあけ

柳条のまらす梅のおまこつていごとらうし祢とあひと  
思

題不知

天地の祢とあふらんあうあふらんめうらりあけ  
海と望し心とけりあわつ意とあひとそとてあ  
あ

人不知

ね山の岩うれ海のみこらうと意やまらんあふ  
人葦舎れ沖袂よ物目ん物きうあよわ

らのゆけつとんこつみの日つらうき

寛祐法師 悪徳童子

あまうむとあかんそれりあ人のあしと物と思ひ  
返一  
後人不知

サヒ

おとすれいふおのほのこしすきつらりいひひら  
なまのほのほのこしすきつらりいひひら  
我もやふんふんふんふんふんふんふん  
ふんふんふんふんふんふんふんふん  
ふんふんふんふんふんふんふんふん

柳平人磨

ふんふんふんふんふんふんふんふん  
はらふんふんふんふんふんふんふん

おのこしすきつらりいひひら  
はらふんふんふんふんふんふんふん

藤原実方朝臣

我もあいたふ井れ志あわらげしと  
返——  
換人不知

おのこしすきつらりいひひら  
返——

おのこしすきつらりいひひら  
小野 宮を政大臣

おのこしすきつらりいひひら  
よみ人——

おのこしすきつらりいひひら  
おのこしすきつらりいひひら



延

君の神よりやうすらんあふふかきとて  
延

<sup>カ</sup>今道にわづはひはのふれあうとて  
延

天曆神時を念ふ 中納言朝忠

<sup>サ</sup>道にあはせあひ中へふかきとて  
延

あふふかきとてあひ中へふかきとて  
延

あふふかきとてあひ中へふかきとて  
延

あふふかきとてあひ中へふかきとて  
延

あふふかきとてあひ中へふかきとて  
延

あふふかきとてあひ中へふかきとて  
延

あまのついでにきこふにきこひてきこひし命をばらけり  
けいせいしゆきり女の家のまへにきこひて  
あまのついでにきこふにきこひて

返—らす

何なるもふもつてきこふにきこひて  
契りつとありてきこひて

菅原捕頭

返—らす

あまのついでにきこふにきこひて  
あまのついでにきこふにきこひて

返—らす

あまのついでにきこふにきこひて  
あまのついでにきこふにきこひて

あまのついでに

あまのついでにきこふにきこひて  
あまのついでにきこふにきこひて

あまのついでに

若くは心ゆくもいふ事なきにわきまなき

ふたね日記

拾遺和歌集卷第十二

恋二

恋一らす しみ人不知

去の世にわらふもいとほしき身とていふ人の  
けしきもいとほしき身とていふ人の

人書

あかぬきとらふれどもいとほしき身とていふ人の

あかぬきとらふれどもいとほしき身とていふ人の

あかぬきとらふれどもいとほしき身とていふ人の

あかぬきとらふれどもいとほしき身とていふ人の

竹の葉のそとにわらう露はまろいあひくわつしほしよの我

よみ人しらす

あらふもや我らあらしそ唐衣身もさあそあはる  
うそ我らうそれあはるいしまあはるのいなさるなり

源重之

そあ河は屋ころう流のや唐衣いあひるいそとあはる

よみ人しらす

ころいほふあつひひいあそあはるいそとあはる

あはるいそとあはる 友原忠房の下

あはるいそとあはるいそとあはるいそとあはる

むしーらす よみ人しらす

あはるいそとあはるいそとあはるいそとあはる  
いあはるいそとあはるいそとあはるいそとあはる

権中納言敦忠

逢ふころの後のあはるいそとあはるいそとあはる

坂上是則

あはるいそとあはるいそとあはるいそとあはる

よみ人しらす

あはるいそとあはるいそとあはるいそとあはる

あはるいそとあはるいそとあはるいそとあはる

らーめで女の一はまらりてあーふは  
しーらる　ふーのふ

カコ

きとを給一月日かむらときふれ言とく一は

は撰

しゆわい

鳴のあしゆふまき霧のまきとひんかまき

カコ

あしそを程あくしあぬかひらと種とくあはむひ

人まら

むまをまふあまきのゆらあゆきまてゆらう一は

カ

種人不知

は撰

いざらね一時あまき種まきまはるまき種あ御給

うらやわやごあはれ一りりめりあはれととあ

中院乃五れ君のりこいそ一めでゆらりて

わあふ　平珍時

おまこを霧まけさうあまき種あゆらりいあはれ

中院のむらあいのまふゆらりかこ

ておりり　大納言源さよけ

ゆらあまこをまよまきさうあまき種あゆらり

むら　よみ人不知

カコ

ゆらあまこをまよまきさうあまき種あゆらり

ゆらあまこをまよまきさうあまき種あゆらり

日影らふ物とふこひさかきとくゆあつとをそくく

都 ー らす けくゆあ

百とくはまひく鴨も我とくゆあ備ふ救はまはし

よき人 ー ら次

ふゆも着にし人よはしゆの言ひをりし道(こ)いふ

嗚るまののみらと思ふふくれゆくやの娘くしゆ

君とふ渡りさあつ冬の新んを巻くもやのねらる

女よ物いひくめてはらうのゆやくえゆくとこ

つらうけり 在原業平朝臣

かたそとあつふ物とさくきんをひとふれはまはる我

女よけりけり ー のふ

おとかりとらゆとあつきんをひとふれはまはる我

後人不知

身とつめい落とあつねとさふれ鳴とといそとん

けしとさ物くくのきんをひとふれはまはる我

よそいとあつは物と新とさあつふとそん

着らりしとあついのきんをひとふれはまはる我

天曆御時方合ふ ぬえん

着れしとあつは物と新とさあつふとそん

とていふ

恋ふとあふくきてうけくふ人着たみよのわらわ  
 女のいゝうらうらうたはなうりてつらうけつ  
 時をわかれぬ我い海をいあうあふゆわふ  
 深き忠節は日ふまよりあひゆるきとつら  
 ぬ日あうあうまき人あひゆるさうけつ日つ  
 けつ  
 けつ  
 玉われとあふくきてうけくふ人着たみよのわらわ  
 恋ふとあふくきてうけくふ人着たみよのわらわ  
 恋ふとあふくきてうけくふ人着たみよのわらわ

忠房う女のいゝうらうらう

けつ

大納言うらう

佐吉の松あねもいけりも君と孫あねあうらう

返

うらうらうらうらうらうらうらうらうらう  
 わらわ男れ松とむよひてけつうらうあうけつ  
 うらうらうらうらう

けつ  
 けつ  
 うらうらうらうらう

うらうの松あねとむよひてけつうらうあうけつ

人まゝ

わいそいといさふもわねも五月のとながゆか  
年とくさひくしてわいおまの月日おまを嫁りた  
秋板りそぬきういまはあはくといふせんう我ね  
うらなうらな

ふふふとさういふせんあそやういふさあに  
秋音たねお朝のちをともみういさくさぬさあ  
えいおねとあふういさくさくさくさくさくさ  
あひういさくさくさくさくさくさくさくさ  
うらな

うらな  
そこの河をいふおねうらなとておねうらな  
うらな

風さくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさ  
あつれおまの約よとせむさくさくさくさくさくさ  
えすうらなとておねとておねとておねとておねと  
あつれおまとておねとておねとておねとておねと

きさくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさ  
うらな  
うらな  
うらな  
うらな



ふーのふ

カ下

おとこぬ我身ありとも指とひの世をたむほし

むーらす 人磨

ふふと君いりとも何ととりてりて我といふん

百葉集和ー侍けつふ

源順

カ上

ふふらんらととぬ身いふぬりりむも何しとをふ

侍後よ侍けつ時むーもれん帝の由めれふ

あひく物のみあひけつふさかれぬあり

とてらふふあす侍くれ

一條栲政

くまのそれそらぬいふせよとてむあふ

むーらす よみ人さく次

我あーらとりほさぬ我とぬ人あふるさく

あうく物い侍けつん

りしとけ

弟の何道は水あふくとも結ひ神のまをさかす

題不知 よみ人さく次

我ふ人の弟葉の露あもやくれ神のまをさかす

カ下

あひらたつるさみらのれ各川をいふらけ

後をなきてやは海邊のこころはつともし人のみち  
よのひくもいづれけり人のひとよきれば  
侍々れし  
實方朝臣

命をまはすまぬ物とせし神のおもひからまへ  
部 らす 大伴才助

いそがしゆともあはらるやあむいふふいづれ  
りしりし

後接 俺おまへ今に家難波あり身とけしても思  
五月あ日あつ女のりしりし

よみ人不知

かえ 思ひぬらぬあやめ草あはけくこねそあ

かえ ねしりす ころ

かえ ねしりす ころ

かえ 思ひぬらぬあやめ草あはけくこねそあ  
晴観法師 乙意郎下子

かえ 思ひぬらぬあやめ草あはけくこねそあ  
よみ人不知

かえ 思ひぬらぬあやめ草あはけくこねそあ  
よみ人不知

何れもいふに似せしむる色もやまれぬやうに  
露もふとけりしはる秋の秋は誰とあそぶを念<sup>た</sup>  
今更よそつと人をもねがはぬ心むして同<sup>た</sup>なりそ  
秋はわづらの病よけねもそののぢけしき

こらふもあつれ

拾遺和歌集末巻第十三

念三

都<sup>百</sup>ーらす よかん人不知

是<sup>百</sup>川のふき風をいひけらにひもやまひらけ

人<sup>百</sup>もあ

わ<sup>百</sup>川の山鳥はねのころあつちし秋と独を独ん

も<sup>百</sup>くーらす

蕙<sup>百</sup>川のくささよはわら雲あはれてもあつちとあ

河<sup>百</sup>もふれぬのやまよけ屋中すのみひあつちとあ

接<sup>百</sup>りねりいとあつちとあ

石上し磨

<sup>カエ</sup> 是月の山をえりてわさくさくもあらまらしてのさび  
<sup>カ</sup> びしらす 人まら

<sup>カエ</sup> 蕙月の山より出づ月まると人よひて君とこそまて  
<sup>カ</sup> 乃月の山やにみよの雲をれみまをりてこそまて  
よし人志し次

<sup>カエ</sup> 老いよとてわさ月の雲を道おちつけよ人の恋い  
人ゆり

秋の秋れ月を君の雲をれ志ししよひららら  
園融院御時山屏風八月十五秋月のけ池

ふらうらあは男女おそけさくくあうあ

平益盛

秋の秋れ月を君の雲をれ志ししよひららら  
月あつとけり夜女のりしつらうさ

源さしあさ

<sup>カト</sup> 恋さしはかよはゆすとも今秋の月を君みらあ  
返し 申務

<sup>カト</sup> 乃月の山をえりてわさくさくもあらまらしてのさび  
びしらす 人まら

久保おまら月をえりてわさくさくもあらまらしてのさび

糸よふ人よふてふはつらふはゆり  
けつたふ月乃あつてとまらぬ

よみ人不知

カ下

秋よみよらぬ月影とあふさめを何ぞか  
むらす けしゆさ

同

てる月影をさほりきりみらねむす  
月を思ふわ半あつ男と思つてけ

中宮内侍馬

カ下

と秋君つらな月とそ都のあまをいん  
都不知 ぞみね

月影と秋君いふりのあふ思ふ人とおま

カ下

ひらりあつ宿よ月乃見えぬと秋君いふ  
むらす 人不知

カ

昔月のあつた月影ありつと秋君いふ  
月乃あつた秋人とおまらゆ

カ下

と秋君いふわは秋の秋を月影のあつた  
むらす 春宮たぬ

カ下

あつた秋のあつた秋を月影のあつた  
よみ人不知

<sup>カ下</sup>夜は中ふありけりさうらういあぬ秋とてををさつて  
けり秋をいんほほしとふよ秋をいけり物も  
<sup>カ下</sup>しまよとていぢけりあひつらけり  
いよひのさうらういけり秋とてををさつて  
むかしさす

よろしくも静けりあひつらけり  
<sup>カ下</sup>ひのさのいけりあひつらけり  
秋をいけりあひつらけり  
いよひのさうらういけり  
あひつらけり

人まら

まらまらまらまら  
<sup>カ上</sup>あひつらけり  
<sup>カ上</sup>あひつらけり  
あひつらけり  
あひつらけり  
あひつらけり  
あひつらけり  
あひつらけり

あひつらけり  
延長十五年御屏風奇



あはれそ宿の妻を思ふらん  
夏衣すまふらんそなたのまゝに  
らてなとほりまゝに  
みづ月乃去らんきりては日よも我袖ひめいふおはす

人まゝ

つらねのさうじを  
人まゝ  
人まゝ

よみむらさき

夏衣すまふらんそなたのまゝに  
らてなとほりまゝに  
みづ月乃去らんきりては日よも我袖ひめいふおはす

天曆神時むらさきのまゝに

よらるるむらさき

神歌

あはれそ宿の妻を思ふらん  
夏衣すまふらんそなたのまゝに  
らてなとほりまゝに  
みづ月乃去らんきりては日よも我袖ひめいふおはす

家の心かけおはす

むらさき

秋の壁紙茶室しをむらさきの

二百六首の中



ウエ

曾孫好忠

わがわがらうまはらぬまの好風いぬ今りともうま

題不知

後人しらす

うまあま目ふりう白落と我身ともあまは

人まろ

秋の風かめうをきく白あけぬて我がかゆれ

信者ら信と回ふりましうひるら能まそとあま

赤人

色くくくくくくくくくくくくくくくくくく

中将のまことあめりまに秋よつまそはら

けり

廣平親王

天曆才一母祐姫元亨  
天禄二薨二十二

秋意の下葉とまをいさくゆ人の心といそ

題不知

よみひしらす

とあゆみ聖人の秋葉をさけいさく物とそ

中宮内侍馬

うろふ下葉うりまをいさくゆ人の心といそ

女のりまはつら

うの

よの葉れおまあはうまはらぬまの好風いぬ

けりゆえ

ウエ

あつとびれん人よはなほあつとびるる心は我思ふに  
よみ人しらす

ねむり月と雪路川のあつる木はあつた日とははな  
下りみらすとえとて松の木はあつたみらすとねむり  
人しらす

我世とわつた心とていふる者れ弟はあつとびるる  
あつとび人しらす

在りて諸卒同

あつとび人しらす  
あつとび人しらす  
あつとび人しらす

あつとび人しらす  
源景明

あつとび人しらす  
あつとび人しらす

あつとび人しらす  
あつとび人しらす

拾遺和歌集卷第十

恋

恋しらす

人麿

<sup>カエ</sup>あさねがし我きやしるるまきひのち枕ふまじゆ

<sup>百</sup>元捕うむとふなりて何しん

有原実方御

何ゆもとふをふなりゆのといそとくしむらん

恋しらす

人不知

白浪うらまをりつと来はひそくひらおとる

一條橋政内よむいむ人なり一里よそとく

ゆたれい人とあはれふそまらゆげつふこ

つし

小式命御

いふてきふとくはむこゆうされいそれ出てとくひ

恋しらす

人不知

<sup>カエ</sup>みまこりれ蓋分小舟さりおひみ我とふよあはれ

<sup>百</sup>若代の壁中にあはれむとむ松ととまはひひつた

人不知

我宿よりゆこふとわあに何しんそのゆえ

<sup>百</sup>浪まらりえあうと鳴るゆひさえ久くとあはれ若よあ

人不知



女とてみくらしふまゝとてこころいへば

よつらけり カ下 實方朝臣

はふせんよ命とひてらひらんつるをとおもわもきり

都らす カ下 よし人不知

らりむれ救ふをゆぬ我ゆへ思ふふむらひら

人まら

急してはあらんあゝとむらむらふらむらわ

くつら急む物とまゝませむそいみらつてありき カ下

よみ人らす

海河のらふたもさるれむむらむらむらむらむら

はく好ま

海川はつらあよもやけむせむそむらつる袖るまみ

万葉集和らゆけり

深きこふ

洞川をばむらむらむらむらむらむらむらむら カ下

女のりむらむらむら

藤原惟成

人志むらむら海のけりむらむらむらむらむらむら カ下

天曆濟時承香殿のまゝとてむらむらむらむら

とむらむらむらむらむらむらむらむらむら

新交女所

るに影さるにみれば面より敷あはぬ身よりぞん

むしらす

よもく人三つは

らとよめあはにむらあはにわらまもきまてとらぬあ  
あさゆやこの下をれ若きおとそれ人の影とらん  
け水の石あはにそらえより人な園遊とふもいとあ  
津の玉の垣のゆきあはに我はあはにあはにあはに  
けの園より田代ゆきとらんとらんとらんとらんとらんと  
つらふあはにあはにいとらんとらんとらんとらんとらんと  
後人のむらあはにけとらんとらんとらんとらんとらんと

百

人まは

難波あはれとらんとらんとらんとらんとらんとらんとらんと

よもく人三つは

カ下

カ下

任者乃居よあはにとらんとらんとらんとらんとらんとらんと  
あはにけのまはと我あはにいとらんとらんとらんとらんとらんと  
屏風のけんま野一とらんとらんとらんとらんとらんとらんと

よもく人三つは

カ下

らあはに人のとらんとらんとらんとらんとらんとらんとらんと  
あはにけのまはとけとせけとあはにけのま  
こつとらす  
天曆御歌

世の人の心をぬきのゆりねに雲かきたるはひ

むしらす ひとり不知

わが意のゆふもあつきのあふれぬといふれあま

蕙根ふらぬふくそつふらぬ下いえあすもふんを

祢ぬふれらるる人今らに我そすす回のきつひ

人まらり

あいらねの親らふとあまらるるもあつふふふ

よむひらす

いほや又きてふもも志あはれわそあつふふふ

はららるるあまのいほれらるる神物あつふふふ

年をくくくあつふふのあつふふてふふ

あつふふれらるるあつふふ物らりしゆらに

いほのきん 中務

ららるるあつふふあつふふあつふふあつふふ

むしらす けしむ

うらとあつふふあつふふあつふふあつふふ

よみ人あつふ

あつふふあつふふあつふふあつふふあつふふ

あつふふあつふふあつふふあつふふあつふふ

あつふふあつふふあつふふあつふふあつふふ

美草にまじりてわが御ふりもなかりけりいかにいかに  
わが御ふりもなかりけりいかにいかにいかにいかに  
なかりけりいかにいかにいかにいかにいかにいかに

伊勢

年月の経るもとおもひに秋のふりもなかりけり

は襖

思ふわが御ふりもなかりけりいかにいかにいかに

かた

いかにいかにいかにいかにいかにいかにいかに

いかにいかにいかにいかにいかにいかに

源経基

かた

雲井の御ふりもなかりけりいかにいかにいかに

みらるとまよりてよのいかに

人まの御

かた

よのいかにいかにいかにいかにいかにいかに

約

いかにいかにいかにいかにいかにいかに

我々の御ふりもなかりけりいかにいかにいかに

入道橋政まよりてよのいかにいかにいかに

いかにいかにいかにいかにいかにいかに

右大將道總母

かた

歌ついでにわが御ふりもなかりけりいかにいかに

いかにいかにいかにいかにいかにいかに



りよいらんらんふんそのおれりしきもあはふあふあ  
なこいせんよそあよこいらおきんしん  
くよつらんけり

<sup>カ</sup>人よあふらんてんてんはむんそあふん  
くよいらんぞそそらんゆらんてん

<sup>カ</sup>と返らんすそつてつらんき

款あえておあふらんす續りわれわん

郎らんす 後人志ん次

<sup>カ</sup>思ます人志ん次はます續らんわんねとのき  
わんわんわんわんわんわんわんわんわんわんわん

え良らんわんわんわんわんわんわんわん  
女のつらんけり

ねあわんわんわんわんわんわんわんわんわん  
郎らんす 人志ん次

<sup>カ</sup>あふらんわんわんわんわんわんわんわんわん  
<sup>カ</sup>んらあらんわんわんわんわんわんわんわんわん  
逢らんわんわんわんわんわんわんわんわんわん  
<sup>カ</sup>すれよあそあそあそあそあそあそあそあそ  
あしんとわんわんわんわんわんわんわんわんわん

後人志ん次

カ  
カ

らもゆふ祓のいうことえぬへー羊は

わすれ行けくもあ

拾遺和歌集卷第十五

惠五

吾祖は師あはれおのけつ母のいひつらき  
けく海世みかこことけりあひむおまはらふあはれき  
野ーらす 人まら

恒若乃君ふじうあから海河建と君といふ日さき  
うーんま

カ  
カ  
持そむ命といまいたのまはあはれいおの世あは  
いといまんとれよあひかひあひのいおはは  
りえりて原とありけむいよそんあひあひあひ

いふに似ては申すに方のおもしろくも  
ありんともいふもあふの中にあつて  
御りとも物々まはるる海にうら  
申すに似ては申すに似ては申すに  
いふに似ては申すに似ては申すに

人の中の家

いふに似ては申すに似ては申すに  
いふに似ては申すに似ては申すに  
いふに似ては申すに似ては申すに  
いふに似ては申すに似ては申すに

重之

いふに似ては申すに似ては申すに  
いふに似ては申すに似ては申すに

換人

いふに似ては申すに似ては申すに  
いふに似ては申すに似ては申すに  
いふに似ては申すに似ては申すに  
いふに似ては申すに似ては申すに

いふに似ては申すに似ては申すに  
いふに似ては申すに似ては申すに  
いふに似ては申すに似ては申すに  
いふに似ては申すに似ては申すに

正徳二年同

カト  
月おきと人のほしきとふと我もいふゆりか能  
ほしとふと物もきとふとれはうかぬとらけり能  
つとふとふとひきとふと我もいふほしきと念も我もいふ  
カト  
ふとほしとふとひきとふとふとふとふとふとふと  
あさましやんとなほも思ふふらぬほしき心もほし

物いゆけり女のほよしきと物とゆふあ  
つとゆりたし 一條栞政

カト  
阿波ともしつとふと人のなかりそふれ徒よぬかふが  
むらす 伴概カ

同  
はとよいあひんとれいひあふととふとふとふとふと

藤原有時

たふ助  
たふお恒興子

カエ  
あふとあけとふととあふとひとらねるともねとあ  
あ

ほしゆき

カト  
ちかろ我身ひらりつとふとふとふとふとふとふと

人まら

カ  
あらあめらやふとふとふとふと我らりの思ひ  
あふとわつとけのよそふとれはなりと一途にふと  
カ  
うたふとあつと何ふとらほまふとふとふとふと  
カト  
わつとや雲れ中ふとふとふとふとふとふと

つとねと

物なるよそいとおぼしめしう神の陰よわがしか

よきしらす

これとよきそわらふあまの波とのよきしらす  
君より我もいしらすあまの神よ波の押りおらあり  
よきしらす波のよ神のよ若わありしらす  
まことあまのよのわが身がわらふ波のよの中そ  
女のりしらすまらけりしらすわのせしらす

深京明

風よよきあまのよのわらすあまの身もよ  
むしらすよみ人不知

<sup>か</sup>波よよき絶となりしらすのつよせわわの波あまの  
我し物よふ人のあまのよのわらすあまの

坂上郎女

<sup>か</sup>あまのよきあまのよのわらすあまのよのわらす  
<sup>カト</sup>よきあまのよのわらすあまのよのわらす  
<sup>互に二返す同</sup>あまのよのわらすあまのよのわらす  
<sup>カ</sup>あまのよのわらすあまのよのわらす

友原有時

歌よよきあまのよのわらすあまのよのわらす  
因融院御時少将更なるよのわらす

つらかりたふいふのせむからおぼしくさめりきり書かぬ

内返

おぼろふいふきり書かぬけりむかひめおそまほ

むらさ

よみむらさ

カト

思ふすつさふさしししたのめらんどうみつた

カト

けしきれさうしじかさるあけし物いそねそあ

おのやまのきりあふさひそあすそけりけり

おのふと我とあすまけりあふあふとやの書かぬ

延長河内承書殿女河内の首あけりせよ

よれみこゆりかひゆけりあてはひつ

つらかりけり

承書殿申納云

人とさけりいひしほの玉れあふたらぬ物を育けり

むらさ

よみむらさ

限りあ思そあしおふ人とけりあうりつらかりきり

あつとあはるうとたのめあうりなうらよせをきりて

つらかり人いふすいあさうみさうみあふれんひり

カト

悪おとさうりそねあうたのむられはさしあ

カト

あつとあ打あしあうらそけりうやせは人のあ

カト

あつとああはるあはりあうらみさあ物そあ

カト

あつとああはるあはりあうらみさあ物そあ

恒カ下ての故は人つらふらふひくねとあはし

小野 美れおちいすくちら君ふつらけり

困院大君

君カ下を想うみつらおまおらりふとまのふとまの

想カ下らす 一人不知

あまらうりふとまのふとまのふとまのふとまの

念俺ぬあまらうりふとまのふとまのふとまの

わらわらしと思ふ念カ下我らららららららら

人まら

とふらに想ひ思ふすむららららららららららららら

たふは女御迷子信長公女らせゆよけもいらねとららら

つらけり 天曆御家

心カ下をらふふとまのふとまのふとまのふとまの

女のふとまのふとまの 平忠俊

逢カ下ふらふとまのふとまのふとまのふとまの

想カ下らす 一人志す

早カ下らららららららららららららららららら

心カ下をらふふとまのふとまのふとまのふとまの

我カ下らららららららららららららららららら

あまらうりふとまのふとまのふとまのふとまの

あふくらすそ祢のこがめはひまふらふては  
とくといふはゆけり人衆はゆきつ男とみら乃  
まのいゝまのりてさ紗とふふとてよもゆら  
ち紗は我あゝ念ひりふらり都れ人のさやほん  
むら

ゆあはまは祢のほくくわつあひつらふ  
いといはひら

拾遺和歌集卷第十六

雑春

むら 凡河内新垣

まのいゝまのりてさ紗とふふとてよもゆら  
よみ人

あはしと年かまはしとてわくに我身のみそふりまは  
あはしきいひよわはしとて常はあねさふらわら  
り

山女屏風 右道

年月乃新来とてねむのあはしとてよもゆら  
延長十五の山女屏風



紀貫之

まじし遊のさくさくふれむしとくも程あふま  
正月よりくまうて事りけつふ又の月何  
ふに志未の書ふ但朝臣のりつらうき

中務之具平親王

<sup>か推上</sup>あつしりまうふわいのきふに梅れ花とそと約おつ  
びらら連ゆけつ何家乃梅のむとん約て

贈之政大臣

<sup>日</sup>くらふふ白ひをこせよ梅乃花あつしふとまよとつ  
りそのの舟院れ屏風よ

よみ人志す次

梅もまらりらさふさびしとんふ今もは書れあつ  
野ーらす 中納言安倍廣庭

<sup>か春</sup>いふ年終うてら我やとのみ未れ梅のむ書まら  
<sup>万</sup>天曆御時人ん取らまよ書れ果と

一條橋政

このえさふつ書てあてまうつれらけ  
とかんく  
<sup>か推上</sup>花の色あすみかとも書れ秘くは枝よもあ書  
おのし御時梅花のりとい侍とてれを給  
て花集せれを給ふは殿乃をのこともあつ

まづりけふ

深寛信朝臣

少佳上

ありてみるひとあはれ梅の花多きこの花白ひまは

内裏乃御遊約けつとれ

春後仲御

少佳上

うらてふ志うふまふ梅の花とくしるまをぬむとす

清和の七乃みこ六十賀れ屏風より

けしゆん

あそびしとありつゝいと我宿乃梅とて喜めすとすめ

都らす

よき人志し

年毎よらさうをれと梅むつら道あつるをいせよをり

因融院御所三丈山屏風十二帖方中

深上

梅えとらふとあつるやつらと壁乃あはれとす

小白河の山花よ新の面白さくくゆくと

たふ人とあつて来りたれ

右清門書云

少佳上

春えそんをといけつ山花はとやのあつとありた

くはよまうしてゆけつわらふとあつと

てよみゆけつ

安はし

あつとふとまれのたつとあつと中いまは

延長十五年舟院屏風の歌とよけて

ちよいつらんあり　ふさ乃はゆき

か狂上　あふとありてこそゆきまを履みらばまふけふまふけ

小一条乃おやのまうら若の家は障子ふ

よーあふ

曰　あふは家のふくもあつれりぬらぬ立やそん

心置ふ志のひて女とわくまてふてあつ男

乃よみゆけり　よん人ーらす

あふといそやみあふまゑにらとらじあらまそけ

人よ物ふとてとららけり男ありに

中宮内約

か狂上

ま日登の藤れを原あふまみぬあふとあふ

女れいふなりあの花よまてけり

けり　な原長能

曰

あふとすも垣ねよつめつりあふなりあふま

東三條院御吾保三年四月十二日カ百崩早　軍九日乃らふ子百てま

あありけりあふまのまといひけり人のあつ

りきり　右末の徳と能

あふらり松もいひ心置れりいひあふま

子百　惠慶法師

むさそみろ子目れねけくふさといそこりもろ番あつた  
むしーらふす よみ人ーら次

まあそそらとせのまいふろみめねよほたゆあふひ  
新院子目 志こふ

一りよのねれりとせといけいふろさろあそねひやろ  
右大將實資下膳よゆきつ時子目ききに

清原元輔

老の世ふふみゆさいありさやと本さふさあれ松きや  
正月叙位ろろろろあよんゆりあひく  
子日のちろよまじとひゆりきろふお位よ

ゆけつ時

大中臣能宣

お位上

松ふれむしをふありあま神のみりそといあけ  
除目のころ子目よゆりてゆきろふ梅家  
又衣れつれひろりまよろみくあめと  
いそてゆけふ りととけ

むしんをあそやめろ水を醒れね子目よまふ  
康和二年まふあ茲人よかりて月のら  
よ民や悪よろりてあこひよろこひと  
のく右近命ゆりろつろけ

志こふ

引合ふとさひあつさういませ嬉しうらむるまに  
都——らす よみ人不知

はさう河原そかうう枕乃花らまは行くそいあめ  
伸乃みこ人しくふういよませゆきうに

弓削嘉言

心置れあ若くあふれと垣ね乃柳と念いよふあ  
去物へまうりけつふつかゆそくしてゆ  
けつ女ともれ整へよゆげつとみくたふよます  
はそくとひたれかともうわらりといふ  
し  
葵朝は卿——

<sup>か佳上</sup>春の整ふとあつむむふあふさりあつりそあわ  
返—— 人不知

<sup>か佳上</sup>去れ整よわくくれとなるとさり由よとさるあ  
都——らす

あさうし香もふくむむ様花まはらぬまふまを  
ま風いものあさゆふ吹そぬされあさひあそみ  
うらむ

はさうん物らほはよ様もあもひあめまはあえ  
よみむ——らす

あさあさのみは花乃はさうんくくそあつらあ

延長御河月次水屏風乃奇

見つ祢

か推と

梅花我宿よのありとみみけさ物草いねあはしほ  
はくさ花さびしくゆきう前よのありとよふゆけり  
人の故乃去りうふゆけりよその花とゆりて  
けりうけり

日  
りよとよふゆけり春のこゑとくひりみまらぬとさり  
見りう前よゆきいけりふ花人前乃花  
ことと梅の花とつりうけり

壬生忠貞

梅とよふ我うけり梅花さびいりてや去とく  
あう人なりとつりうけり

河津守津茲

梅の山の前さびとくもさびいりてや去とく  
むらうす

をらうこれとみまへ白浪のよふとれもさよは  
もつ花のよまう子はは里たりうけりてくせ

ゆりれい

僧正遍昭

ゆりてうけりては花のよまうはははは  
後二位藤原子平院贈左大臣藤原  
系孫河津息前まうす

あてまつりけりありけり中に

友原忠房朝臣

萬のむらつるふはまき日誓のきふらふゆふと花を流  
あてふらくとわひつら梅花とそ君ふみふぬつあ  
まきあふら梅花よまきとらひらてそまら梅花  
園融院河内三戸山屏風よ花のふれあ  
んてあてまつりありけり

しゆり

世中に梅を物とふとら花をまきつらんけり  
清佳ふ家ふと池のけりら梅花とふみ

少雅上

梅けり

しゆり

梅花をまきつら花をまきつら  
上総のけりとして梅花とら涼軒光  
あふとらふら梅花とら

友原長能

東海乃野られあまよとらてそあはれ梅の花を  
清佳ふ家のけりといよとら火けりら梅の  
花とらりてそつら梅花とら

意盛才 字王五

日の中ふら梅の花をけり人のまよとらしそふ

山嶽と見ゆそ 平らうんさひ

深山木立の葉をふりまきしるまてふませぬ書きたる  
こびらうらゆけり時よこしむいゆけり  
そとみゆき

友原長能

こぼらうらゆけり時よこしむいゆけり  
石の葉をふりまきしるまてふませぬ書きたる  
こびらうらゆけり

うらめしうそく心山嶽あめふりいと風ふき  
敷廣式部つらみとれ女侍あつらひにゆ

くふらうらゆけり時よこしむいゆけり  
とて けしゆき

板橋

乞師の道あふらうらゆけり時よこしむいゆけり  
延喜河内南殿よりつらみとれ女侍あつらひにゆ

源公忠朝臣

よのうらゆけり時よこしむいゆけり  
とて けしゆき

板橋みくらうらゆけり時よこしむいゆけり  
年毎のまはらうらゆけり時よこしむいゆけり  
あつらひ



年々いふまゝに世は地あふれおぼえはよき  
二月は月ありけりこゝろのさき  
けり  
菅原捕貮

春風の巻も屋今もかきひくおぼえは  
屏風乃繪よ花のりよあをいふ

浦人かすよと烟よむよの浪の波よとあをいふ  
延喜御河内屏風より

貫く

風ふれ河風よく吹く浪の波はあま  
亭子花束扱乃よとあをいふ

ちの鏡よとけ物よとけけりおぼえ  
けと雲よむすいよとけけりおぼえ  
一條乃よみ  
貞平親王女  
大和御河内息下屏  
木のまゝらあふれとあをいふ  
おぼえはよき  
てゆれぬけりまゝに  
ふれりてゆえよつきてけり

如覚法師

春さくあまそいさ梅花あま香りそ枝ぶのり

右衛門督公任のりし侍けり此日月一日よ

つらけり

たの臣

寛政元年十月以故不出仕  
二年七月廿一日上表辞中納言  
勅殊加後二位即日出任

若の事とそらやそつう言れ松よとせてまことすまわ

返

公任朝臣

初よりまことすまわぬ侍ふくれの言れ公

日月朔日よみ侍けり

りしすけ

春に行都公つこい海り思ふらふ志の心くれ

延長元年九月廿八日は皇御六十賀系程

のまことすまわぬ侍けり屏風の奇

友の歌

此のゆゑ

松風のふりしうきりうららとくあやふとくはまき友

延長河内藤太の友歌集せしを侍けりふ

殿上乃をれこととすけりまづりきりに

皇太后御指す皇國章

友のたまれ田まむしとて雲とのそあやまき風

たの臣乃女れ申文のまきみくじり侍けり

屏風よ

右衛門督公任

雲のまきとそらや友の歌のまきとそらやとてあやまき

讀人しらす

少任上

葉のそとにそれたるはむ松れみなりとらふいはり

都一らす 人も路

郭云うふひさひの卯花のうきこと<sup>ね</sup>はまやうき<sup>ね</sup>

屏風の繕よ 重之

卯花のしきうきねよやうり世福ぬよめをせらるる

みられふはゆらとそりて故郭云とて

実方郭氏

年をくほふれ乃何名や人もあふねよのそを

女のりしとらふいとらぬの招うて

くす玉とてせめてあられなるもとあ

男れいひをいせく侍けし

うらみとす

ふとそつとふとそ何きたりふぬはしをねあたり

廣義云家淳子一

りくすき

くさりまるととやめはひこも怒たう<sup>か</sup>

都一らす 大中後捕親

是<sup>か</sup>川<sup>か</sup>の山郭云とあきてあそくれ時よありのし

海上節女よつらげ

大伴家見

日  
何れもしれどもよき事なりとて  
御守は師

雲とよみゆき

終末のつらきとけりてこれの葉に  
延長七年十月十日

延長七年十月十日

字十卷一約けり時の屏風

はくゆき

床をたもとせられしなりとて  
一條橋政の山方なりふ約きり時

一條橋政の山方なりふ約きり時

けりて  
贈皇名文懐子

高し多ふをほくせり何れもよき事なりとて

新恒

少佐と  
いふにむねあり

茶葉なりとて

拾遺和歌集卷第十七

雅秋

屏風よ七月七日 涼きよふ

七夕の空のまじむけのあめいづくりまづらうらなを  
因融院の屏風よ七夕まづらひあつたまは難の  
りふふ男をそり 平兼盛

織女のおぬまもゆふと夕まをどりまづら  
七夕はねのうらりいづらけり

はらゆき

<sup>任</sup>あつたまをまづらふと夕織女のおぬまの空のま

郎いらす 人まら

<sup>万</sup>海らとや舟をせとせふふとひらぬと君をたが  
七夕まづらひまらぬあつたまをせ給けり

天曆御歌

織女のおぬまよふと河をひらぬとあつたまは  
郎いらす 人まら

世とて我をすいふと七夕の涼れ玉のまをあらん  
天禄元年五月廿一日因融院のみと一書  
よわとせ給てらんこせ給けりまをあらん  
七月七日おぬまのり内のまをあらん

か秋

ら道けりる扇よとくねくゆけりうすののり

つましくゆきり 中務

玉河ふらほしとせ夕ふあふされせとたやふほ

元捕

あま乃川ゆふれ風よ音道そそよみさうらふあ

にや一由時御屏風七月七日秋琴ひく女格

あり 深きこふ

このねあそやひあれ七夕れあぬとれとせしよあね

仁和御屏風よ七月七日女のあゆきうらふ

平定文 仁和寺に未勅定文あり

五番

あれあやとをりあらてさむねさらし七夕つあふあす

七月七日ふよみゆきり

友原義孝 石室のあまの宮に在り

秋風よ七夕つあふとくえいあつせあつあらんすん

穿昭うりうらにまらわらうとそ七月さ

舟よのつとゆきりふひつらうけり

右清門書云任

天河のられきやふらけきとつとそあぬあてほほ

七夕垢朝よまらうらうらりあよみく

をこせそゆけりあよみ

けしき極く

あひみそそ一日と君ふあはね七りありと我さまは  
むしーらす しみ人不知

ひまーさりせのひとをねらや初雉音あらうらん

天曆御屏風よ

りやや<sup>後様</sup>様よあうはそのおまら秋立音とわら

之條を改大名家あう方介あつて何

まうむしやせゆけうふさうはかとのむ

とふとと 漆重く

新水のうに白う女節花志のひよ路やおひとん

扇の前裁刃ふ中とと海してさうりけ

僧心遍照

か様上 家小と何あやらん女良も人の物ひらうあう

むしーらす よみ人不知

か様上 秋の整れ花乃色くそりよとて我家よふらうて

再思乃野中ふあう女節花とらぬ人あじと

園融院御屏風よ秋整ふまの整れ

これそらふあうあう人あり

平惠盛

家つと何まうは花とねるふは神くも鶴とよて

をいかにしとふとふれしとて

けしゆき

か佐上

小倉山か佐上の立竹たけのすく麻のつよけり煉とて今をさ

部しらす

こころお粘よもふろ物ふれしとてききりさよみせたり

うーのふ

ゆりほろをさくならしひんふれせ中とてむじさあん

中宮の内よたうしゆけり時月乃あつら秋

方よみゆきり 吾滋乃政

九重の内よあつら月歌よゆきてる宿とていひとて

延長十九年九月十三日此屏風は月よあつら

て航渡後 よしんしらす

百あつらあつらゆき鶴とみくららす秋の暮れ月

八月よ人のあつらつり殿はゆらしとあまこを

て月とらんる ちいふ

あれ面よとわつ月のあつらけさあつらあつらあつら

清徳云五十賀乃屏風なり

りしすけ

うつ井れ明とてあつらお飯の雲ひとあつらゆきあつら

部しらす 曾祿好忠



虫かぬ人をよめぬ我々の秋の聲とて君をひり

人の中

庭草のひびくあふりてひびくは鳴きあけの秋の聲きり

三百五十四首中

秋風いふさあやうりそ我々のあやうくせうもはれ

右八将定國家に屏風より

三つ録

任うれ雲と秋風あういゝ思うらそあつあつあつ

むしらす 人中録

秋風のさびく吹あう我々のあさらうりひびく

秋風の日よは雲の我々のなれは木葉の色村より

秋風あふひくのの秋の葉とやらうんまのあふ

らう津ならあよ音あうふさうりてわれ

ことさうてあつたの事にあつてみさく

ふさうむいふ人なりとあつてこれらうあん

はまいそくみじとあつていふもは

あつていふも思ふすもいふもいふあつ

ようもいふも思ふすもいふもいふあつ

らうらふひてあつてあつてあつて

女

秋露乃下葉よつきてめふらくろそあう人れんをみ

返一 けしゆい

世中人よ心とせめふる葉葉ふ色をみてしをねふ

返一 人まら

けしあつさ露よ我とれ萩の下葉は夕村ふたり

来とらむと夜明りよひあけは露乃下葉の色は

よみ人しらす

みよの池よあつさうそ菊は志をけしめてさ

天曆神時菊のえむはきうあふふを西

つりけり 忠見

吹風よらう物あつさ菊は雲おありともあみくま

物ねこししつりけり男とあまはつてほよ

さくろらうひはきうとつらすをて

よみ人しらす

老う世より人のさぬ菊あふとらふあふあふ

返一 人まら

よかこうあつさおして梅田よりてれさめしはの

屏風よあつさうひのさしらすかきうをて

つりけり 忠見

輝とらりつらつはつさう老とあつさうをて

あつさ

か佳上

延喜御時月次御屏風の奇

三つ子

少佐上

らて世と世のねとわらひのゆりうり居よの  
こころに秋うらさふまらりゆて舟のま  
つげのまゆ

惠慶法師

日

奥のよまてらほさるる舟もまらぬ

都いらす

よし人不知

久保月とまけの御業ははらさるる舟もまらぬ  
舟子能く井川は舟業ゆりて舟もまらぬ  
ぬこもまてらほさるる舟もまらぬ

とて

小一條と政大臣 貞信公

少佐上

小倉のよまてらほさるる舟もまらぬ  
舟人れりまてらほさるる舟もまらぬ

大中長能宣

舟のよまてらほさるる舟もまらぬ  
都いらす

よし人不知

白浪のよまてらほさるる舟もまらぬ  
見つ祿

舟業はまらぬ舟もまらぬ  
舟院御屏風

あはれのみくあはれとてあはれお業のちやふらせぬん

内裏の屏風よ 清原元輔

少佳上

月影の回あつて河は清く流れの網代はひびきのよるをみたり

若人取よさやひびきの人の氷真れつひひよ

まうらひけつとて糸よ竹あつてなごころゆ

山の上なれ 修理 内通元友真の女

いそぎあつたのひをいともえゆよよりてう我とさなを

都いらす よみ人不知

まうらひけつとて糸よ竹あつてなごころゆ

九月つこりつとれ日男女燈ふあそびしてお業を

見ろ 源元輔

いそぎあつたのひをいともえゆよよりてう我とさなを

十月けいあられ日殿上乃ねのこもさつ燈

よゆりて竹あつとりのふよらまして

清原元輔

妹もいそぎあつたのひをいともえゆよよりてう我とさなを

河ふと りのふ

松のよのの燈とて秋の月とこれとては書とあつたをり

十月とつたれとえけるかな

源元輔

五律中法平同

みよとさげの昔あつたさしたきくうらうらひらりきり  
冬おやのしるふあひくはつきは師るり  
つらうけり  
まね

少佳

お葉やありとありん祢去月志らうとふのまは  
天曆沖河伊勢う家の集めりありき  
まよすそと  
中務

少佳上

河あけふりはやとのれうれあつむしとあつら  
沖返り  
天曆沖家

少同

昔よりあつたき宿のまはらうのなかふらあつら  
檀中細と義懐入道一とのらむとありき

同

院よやーあひ給ひけうらとよりむんこれ  
院よはきうあひらり十月のらひつら  
このうらうらうらうらとあつたふらうら  
二百廿それ中に 曾祢好忠

海よあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた  
あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

高岳相如う家よそれあつたあつたあつたあつた  
あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた  
あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

ゆとりふくろけりてそとせめをね

東交女産人た道

少佳上

限あつてふたねとさつむ井たあに程そとへまら  
なふあつてあつて人のこまらとこらたれ  
かこもつらふ日けとそつていつそりけ

あつて ころのふ

日

まのつらとそとねさうさ日けもそつてあつて  
右大臣恒依家屏風は藤河系うらあつ

あつてよ けつねえ

日

黄ひつておよすあつて夜とねつてつとつとあつて

都いらす よみ人不知

ちとあつてねのつとあつてあつてあつてあつて

あつてあつて

少佳上

むらねあつてあつてあつてあつてあつてあつて  
書とあつてあつてあつてあつてあつてあつて  
あつてあつてあつてあつてあつてあつて

中務丸と具平

あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて  
あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて  
東宮の山屏風は冬野やあつ

藤原通頼

加賀守俊五郎下  
右少弁雅村男

いぢい下ふあゆみおの聖宗は眩まめさひかり  
まらすれけこりあさうふあふらうへとあけえ

はしゆき

霜ふれに梅のあさひかりまよふ我のあむと  
あふらうとかりふまよとてあけらうとあけりはを  
けらうとあけりひとせとてあけ

三絶元夏式アノ痛理平子

梅はあゆみのあけみつるまはありのらうとあけり

返

つと梅は

梅はあゆみはしとてあけりのとまらあさあさ我のあ

まらすれつこりあさうふ年れあけらうとあけ

ひらあいのあさうとてあけりあさあさあけり

らうとあ

お位上

拾遺和歌集卷第十八

雜頌

延喜二年五月中宮御屏風元日

紀貫之

所よりならむとす百とせむ言れぬあはれきふそ有けり

屏風よ

伊勢

少佳上

とろくと雲井とらでけぬあはれ未とくながゆうれ

九条右大臣五十賀屏風は竹あつたよしの

木らくとつり

りとすけ

類乃ちととれはげふむあはれ竹のなりき世よ是露

あめあさこれ物にさのこふ結きつ何よりい

はらこみとよきそこれいのかつこひあ

あふあといひたれ

美世とく人物に純乃まれらひらけ後のまらこあつたり

東交乃つふさりの石めけまら三十一とけ

んこひとらよむりやとひそまのつせけ

後人志す

若むさむらひもく人らき石の敷とみふさうらひい

賀屏風人の家よ松乃りらり象そり

貫之



松の孫よつら泉乃水されい海にた物とゆえとそふ

冷泉院の五六れみこも海にゆきつひいと

とせくゆけり たる臣

岩乃上れ松よめくんとてい母よまれらあつあつ

わう人の産してゆけり七秋

りこまけ

松のえのりつらえいととくそとそえらるるつれむか

と武園章しまらぬいふふらりことしてあ

とあよとせけり

去る昔らよせとていおいとあつあつあつあつあつあつ

形 ー らす ー よもく人不知

我のやととあつていさゆれ尾よふとて松とてあり

延長洲時勢院屏風に枯きんーいなりて

はくゆき

い母ていその松を昔より立よる流や敷いとてそ

人乃くくやりーゆけりふ

りせとせけ

こひいれあふひく雲とあつて位乃れいひとあ人

天曆洲時内裏とて平れんこも海にゆきつ

けりふ 参後好古

百歳よりせむらひ暮れとせむの君らあやむされ  
五月の月ちいさくはらりらまきいとよまけ乃  
こふ今くあめまのされ物に乃むすめふんさ  
ととて  
去宮平兼道總母 長保三年  
詳右大将  
ふ所あさみさふうこ色いらとせのさ月うつう  
天徳元年 右大臣五十賀屏風り

清原元輔

ちとせん君かま所のよらされ天の志こまじら能  
東三条院乃賀た大臣れゆらうはんち  
めうらけとりて方よみゆけらふ

右衛門督公祖

君の世よ軍つゝあいつくしつゝ進んたあはん時  
右大臣あつらりあゝあめてとらりらゝめ  
けつはふと作り方あそんていよ事せゆら  
ふ水附多々桂樹とふとと  
佐々木末代のみあられみさりの松れけとらせえ  
あう人の賀しゆけらふ

権中納言教忠

ちとせあおの病とあまらうひうきりのあを  
清和乃女七のみこれ八十賀重明乃見この

し物ける時乃屏風は竹ふ書ありくさ

こゝろあよ

はくゆふ

かほ上

まゝ書ありくせとと世中そは行のみりかゝる

子ととみりていつきを物けるふとゆふす

とと

りとし

帯にまあるのゆはをどみほしてむ命なり

中およ物る時右大臣源致方御長や御孫

と知りてつ子すと 右大臣実資

流儀乃つらまあすすむめのをれ

むのころ御下

孫重とて入りのとこそ見ん

はくくまうりける時ふゆとゆのい

とりて物きらみらけくふ物ける本ふ

くつさつひて物ける

春はりえ輝しこゆゆとゆとやま

りとし

子すももさり色きありとそ見ん

後上  
義方

まよしみひりてつとむとめれり

つとす

右大臣忠君朝臣

ねりひあらしぬるをふとあわら

つたふ

かゝらそとあつたふのよきまゝ

むらゝいれもやとあつたふのよきまゝ

くゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

くゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

とそらうゝゝゝゝ

とふやそとあつたふのよきまゝ

ふゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

らゝゝゝゝゝゝゝゝ

とあつたふのよきまゝ

つたふのよきまゝ

つたふのよきまゝ

ゆめふあつたふのよきまゝ

ゆめふあつたふのよきまゝ

ゆめふあつたふのよきまゝ

てあつたふのよきまゝ

人ゝあつたふのよきまゝ

良峯宗貞

あつたふのよきまゝ

平貞文

むいよせいあゝふらうそき約乃總ひらすすそふら

よみ人しらす

少佳上

を、今いかりふまを

勢の本もゆりくくくくくくくくくくくくくくくく

夏扇冬火おきい力いふてつさあさふよりと

念すふ佛よりうとくいせい我を降おれわうく

少佳上

灌佛乃くくくくくくく

灌佛日御布施童女持斎  
殿上人扶持如五帝

唐衣あふりおつうあおそ我袖あすりのやあふら

修理な更惟正うあふま方たうはゆらとさ

けらふいこくゆけく枕ようさうつけゆき

友原義孝 右通少お

はくらくんはひらんあおれ枕うてひと秋福ふは

おあ少将ういゆきう前よ昔部で致平

乃みもゆりておおの若おうくくといせく

ゆけくとのらふさゆくくの見たおらひつら

あやも我おまなとさうおみさういよと今

あさう人乃りいひつらけ

平公誠

くま衣くねいさささささささささささささ

年月くくくくくくくくくくくくくくくく

ゆけいしあはらあああああああああああ

少佐上  
曰

後久しくなると建は約されぬの男はかゝると  
さだしくとていひてぬかきつらげさ  
といつらうきりよみ人三つ次  
ふわりとよまゆす世中にあるわはむはむありさ  
こらひげう人のひらうをさす約され  
ぬうあそつらす

君らそと世おん色之ぬ竹のあらねおひらうま  
延長十七年八月宣旨ふよりてよみ約ら

紀貫之

ふみんとさいふまらうくを月と暮といぬ

百

柳舟人丸

あつらむさひひらうすいひらうとあう  
美日使はゆりてゆりてはれら女のみ  
つらうけり 一條橋政

少佐上

ふらうとゆさそらん色とれとらぬ置はみらほ  
あつまらうゆら男ゆらりのかりてさだく物い  
ゆけら女のりといふまらうあはさきうふい  
さのかりつらう作といひ約され

よみ人三つ次

なつらふと思はれぬ東路はまをよみ

曰

女のしつらんしつらんしつらんしつらん  
女のしつらんしつらんしつらんしつらん

人のしつらんしつらんしつらんしつらん  
人のしつらんしつらんしつらんしつらん

書つらんしつらんしつらんしつらん  
書つらんしつらんしつらんしつらん

大納言朝光下らんしつらんしつらんしつらん  
大納言朝光下らんしつらんしつらんしつらん

てゆらんしつらんしつらんしつらんしつらん  
てゆらんしつらんしつらんしつらんしつらん

春宮左衛門道總母  
春宮左衛門道總母

けつらんしつらんしつらんしつらん  
けつらんしつらんしつらんしつらん

いそらんしつらんしつらんしつらんしつらん  
いそらんしつらんしつらんしつらんしつらん

日 為らんしつらんしつらんしつらんしつらん  
為らんしつらんしつらんしつらんしつらん

ゆらんしつらんしつらんしつらんしつらん  
ゆらんしつらんしつらんしつらんしつらん

大納言朝光  
大納言朝光

中納言平推仲久しくありて世に  
てはまらむらひふくせ約けり

高階成忠女 後二位成忠

養子の思ありは母中と仰るまはふにあらずん  
むらす 源公忠朝臣

人を見よむらむとわらぬまをくそむを想ひ  
た大將深河うあひたりて約けり女はくふ  
まらりくそりむらふ美方御下宇依使を  
くそり約けりふつきてとふくひよつらあり  
くれん 友原俊生女 少納言

まそ 孝子いひさ乃松糸のさあまこ我身おさこあけを境

成原朝臣は師よたりんとていひむらあり  
後二位下右近中納言長保元年御入道中納言義徳男  
て宗のちあは枕とてとりふつらありぬ  
くまつきて約けり 則忠朝臣女 後二位則忠

いふまらむらむらふれりやえと身よりわら  
たまらけり



拾遺和歌集卷第十九

雜恋

題一らす 栲牟人磨

し女子の神より山のふもとに久しき世より心ひそめてさ  
いりりよ海へてあひくゆきと女乃物ひけ  
ゆけもこといしくも一ゆきさりなれん

平定文

いあり山麓にれ敷と人よりつむおれ人よりとてえ

題不知 栲牟人丸

<sup>少佳上</sup> みまの玉えれあよとて海よりそのことを思ひまはるね

大中臣能宣

<sup>少佳上</sup> わいありとゆいよひふさいむらん人のらと人かあやと

よこし一らす

<sup>少佳上</sup> とくろれいらふあてう人素れあそやまむむ物も  
おとよおとくういらん人のかあれはほすまむ

けうれ建ゆくら時 贈を政大臣菅

<sup>日</sup> 天の下ゆるる人のあまれりやとれお建衣むしほあさ

題一らす よみ人不知

<sup>日</sup> いはれもあそいあね白雲がいらぬあけのしそあふ  
あそ書あふあそいすう人あゆあゆいあせてけあ

いけとてつとまれば糸もやとみんはほとあはれ人乃あはれねん  
ゆこ少およゆけり時う袖まらればまへとゆり  
こころきうふあすのうねかりあつてゆり  
おつらうけり 小野宮を政大臣  
念重ぬ人まらうりふあめらたうあめらと秋  
返一 明日香末女  
池水めそいゆつては福あふれらるるをいふまらん人もあ  
中細云教忠無傷依よゆり時よ思ひて  
いひ契くゆけりゆれば世よこころえゆりまれば

右邊 季繩女

右推上

日

念重とあめらとと柏木なるもよ志ふきん世ふあはれ  
あじりなればあよこころひけり女のりは秋  
しう思くゆりこころ男乃いひまれば  
よみ人こころ  
秋露の花をうとみぬ宿あはれあつたうらん可くあ  
都一らす  
こころこれいそきてきうつこころあはれいそあてまおはら  
人のめ一ゆけり男れまよゆりてあはれあ  
りこころいそき  
思ひつこころをこころ唐衣ひもやみこころあはれあはれ

さゝいりたりとみゆきを女よふふのらり思てか  
 よいゆけつれいさのいりつゆしてはゆいばい  
 てわりとあふく〜てう〜れななりゆいゆき  
 けいあていひつらうふら

まのちもいれあ〜つていりな〜しくらめもあか  
 男のら〜ら女よからふけしゆてあ  
 ね〜ゆき〜ら〜けら

少佐上  
 あととも〜ゆ〜ら〜の〜  
 まのちもいれあ〜つていりな〜しくらめもあか  
 いのゆき〜〜  
 け〜ゆき

ひよ〜ゆ〜れ〜い〜ら〜の〜  
 三條乃高侍よあ〜は〜わ〜り〜て〜ら〜ゆ〜い  
 よ〜ま〜り〜ゆ〜ら〜ら〜れ〜ゆ〜い〜ま〜ら〜え〜ゆ〜い  
 くれと車よの〜ゆ〜い〜ゆ〜い

あ〜ゆ〜ら〜ら〜ゆ〜い〜ゆ〜い  
 都〜ゆ〜い  
 よ〜み〜人〜ゆ〜い

ち〜ゆ〜れ〜ゆ〜い〜ゆ〜い  
 久〜ゆ〜い  
 ち〜ゆ〜い  
 あ〜ゆ〜ま〜ら〜れ〜ゆ〜い

都一らす

新水の所あふくそさえうり人のふらぬとあはれを  
とくくしひるなほ池のあふさあさともさうさ

互原業平朝臣

そめ川とさし人のいそふふあつてふこのはらん

賀茂橋河奈れ役よあらてれわいささう

の氣よあつてたふ長乃水方なりといひつ

りけり

昔傳 斎藤兼盛女

ふらふらの河高れ友流いきてとるくとれあふら

都一らす

よもく人不知

世中いつい世はあつたあを業乃松れあつてはあ

じのよあの中じふむとふあさかめらの橋かては

そ中いつい世はあつたあを業乃松れあつてはあ

いそふふあつてたふ長乃水方なりといひつ

人まゐり

石見あつたあゆのふれ本あつたあつたあつたあ

いそふふあつてたふ長乃水方なりといひつ

そ中いつい世はあつたあを業乃松れあつてはあ

あつたあつたあつたあつたあつたあつたあ

社いつい世はあつたあを業乃松れあつてはあ

のひつらうけり 天曆津家

君の思ひは糸よりこころれをにかりしよれ  
うなる人のひつらうけり

はくせき

思ひは糸よりこころれをにかりしよれ

うなる人 人まゝ

うなる人の里にわらわしとらうそらうそらう  
美日云井くれてとらうしとらうしとらう  
物まよりまらたよとらうしとらうしとらう

海上節女

是則

少佳上

我せとらうしとらうしとらうしとらうしとらう  
人の玉まよりけりふ海士れをにかりしよれ

惠慶法師

あつとらうしとらうしとらうしとらうしとらう

仁和津屏風よあさ志保とらうしとらうしとらう

大中臣頼基

あつとらうしとらうしとらうしとらうしとらう  
あつとらうしとらうしとらうしとらうしとらう  
あつとらうしとらうしとらうしとらうしとらう

あつとらうしとらうしとらうしとらうしとらう

うたへし海　　さしひら

さしひらさしひらさしひらさしひらさしひらさしひら  
中へいひさりあふたりと女らひひちけしむら

りしすむら

むらりむら幸へけつふもねじしと救あぬむらあつらつら

むら　　らす　　ふみ人不知

風もさしひらさしひらさしひらさしひらさしひらさしひら

紀節一女よなつりけり

中細云家持

久保のあつらひ日よいひひらひひらひひらひひらひひらひひらひひら

男はまよりあえこりけり女のりこいあつら目み

あつら目みあつら目みあつら目みあつら目みあつら目み

とそあつら目みてあつら目みてあつら目みてあつら目みて

よみ人よみ人

あつら目みてあつら目みてあつら目みてあつら目みてあつら目みて

よみ人よみ人あつら目みてあつら目みてあつら目みてあつら目みて

日能乃時を望むるあつら目みてあつら目みてあつら目みてあつら目みて

けりけりけり

あつら目みてあつら目みてあつら目みてあつら目みてあつら目みて

女らりよいあつら目みてあつら目みてあつら目みてあつら目みて

よみむしらす

きふくも何となく白菊はさく世と物と我

忠君宰相ねんざいのふら女はゆらりうひてり

あてしうりともひくくゆくれらん

枕とそくゆけつと返しをさせらけし

涙川あまゆきもあまの枕をきくゆららん

延喜御時梅紫れるよふあひらく

あくゆめれとつきてうせけり

世中とくおれ物とけしとけしきとせしり

内返

けしとくおれ物とけしとけしきとせしり

むしらす

伴勢

我お佳上をふくも何となくあまの物とけしとけしきとせしり

けしとくおれ物とけしとけしきとせしり

一條栲政いとむしらすとけしとけしきとせしり

よみむしらす

石見うけりふくも何となくあまの物とけしとけしきとせしり

一條栲政下らふゆきつ時形香殿女御よ

ゆけり女よあまのひて物とけしとけしきとせしり

よみむしらすとけしとけしきとせしり

ふそこいひしうゝありきれた

平院約位

少雅上

そしめぬとせむしとてあはれいひしうゝありきれた  
都一らす

見らする約乃つまはしきまつら君を我れつありた  
君れいひしうゝの神そらしめとては違ふ人とは地りえ

延長河内中文字屏風

此のゆゑ

少雅上

いひしうゝとて思ひみよありとてはつれよをまける  
いなりふまゝとてけしうゝしとてめてゆき

女乃こころよあひくゆき

藤原長能

少雅上

我とていひしうゝの神とてはつれよをまける  
猶荷乃りわくふ女れもあはれとてまてゆき

よみ人

少雅上

流の水よりてはゆいありては日の智とてまてゆき  
元良乃みこころよあはれとてまてゆき  
お梅とてまてゆき

思てまてゆき。林とてまてゆき。あはれとてまてゆき  
女乃りしうゝの神とてはつれよをまける



りーありけり

ゆしそくしきまらひもけしうれと風ふきて

都ーらす けし世へ

むしりて世へけしうれと風ふきて

三條右大臣家の屏風よ

五とらうのまゆひさしはさきほろくやんとうみゆん

年乃をりりふ人まらゆけりむのよめ

けりぬ

そのあつわさしーんとまらゆけりむのよめ

かめさうしーいぬ

拾遺和歌集卷第二十

哀傷

むとめふまらりをらねく又の幸れま梅の花

さうりに家乃むとんくいらふふひとみふ

とふさきとよめつる 小野宮太政大臣

梅むのをさうりきりけり人とうら海そまらねむらけり

平益盛

おとひふるこのとけら梅花の世乃志とひんとすん

清原元輔

花のなを宿も昔なれあうらまら物な露をそ有けり

人中臣能宣

日 振旅のふのうゝ露けさの本のあともとのふふふ  
ふのうゝと実物てはよ

中納言進光

日 若きさい中納言のしほ振むせのたよりふささう  
中納言教忠まよりうゝて後むえれあはら  
りとの物まらふささういんゝゆりて花みゆけ  
ゆよ 一條橋政

日 ふうからさや人のねみまんと今むうゝやせ  
天曆乃みうゝこれあまひて又の幸れ四月

あひよのさ田のうみらうりといつらうけ

女主人共庫

さ月さたりあゆされあやめ弟さひはは孫をさるる  
ゆゝあひさひひゆらうあやさりらりあはらふ  
さうなまさたりかりゆよけうのちれ幸あひそ  
ゆけうと見ゆらう 粟田右大臣

あひのやあやめさあふよとけうらあ世のうさひらま  
右大臣能宣のふさゆりうゝなけうふあやれり

よつらうさう 右大臣 能宣

少下 家ふふつさうふあゝ郭さまうてう井れあひらふそ

あさうわのむとふりたつるすそを

藤原道信朝臣 恒仁正左衛門  
天曆五年辛亥三

少佐

おふかどけふもほふとさひらん人とも花の山をみるめ  
夏もそのお葉れりり妙りあつふつきそ女  
おのみこれりこい 天曆御製

河ふそそそのお葉あよきりいふふのりさひりらん  
妻れあくなりてゆけり此秋風乃秋れむいふさ  
ゆりれり 大哉四章

さひまや雉の秋風乃さむげさふとさきそ藤よひり秋  
中ふくれ給ひくれ年乃秋水あの前裁よ

露のそえらうと風乃吹あひくけつと吹らん

天曆御製

少佐下

秋風よりのさ葉れ露らりと消は人とあわたえ  
妻よゆりなをさそて又の年れ秋月とみ

ゆりて 人まうら

去年みじ秋乃月あそせとさあひみ婦いりや

天曆五年八月十日崩

朱雀院の御宇九月は事ふの院乃池  
乃れりふ言あらしそりてゆけりそそ

権中納言教忠 天曆五年薨  
朝志丸

君あきて立おさりのなとも池はへさそそゆりけり

わつこゝの池はうのめれ身おげあつとて

人の中

少佳下

つれりこゝゆきいれつとて後澤の池乃玉りこみそは

むしらす

よし人不知

少佳下

ふもこゆめうさ母ふとみそめれ家の袖乃おきお目そ然

服おさゆとて

曰

有衣りてとらつあうと川さうあもゆさうあそたう

ゆり衣さうさういさあさうあ波の玉れをともあうらん

恒法ふれ服おさゆとて 正暦四年

有衣道伝物

少佳下

限あさのきおあささそてい有衣をそおれ袖い波あつとそり

そ一のふうならはとけつ時りうらるる人の重服

とさそゆううとそて母りりこららそあふ

むすひ付くゆけり

少佳下

むしりーびひのちあさとむむしそわはつ雲深れ衣

あふあふをささく能はよとゆけり

大はる巻

曰

有衣あひみをもとさひせのまうようつとてあくはめてほ

年ゆきとつあうらん床ありてあひあふらんよわき

むしらす よし人不知



大納言朝光のしし女御まらりて  
けりしとて侍てはししとていふをせ  
て侍りしとて子馬助らりてけりしとて侍  
たりし

右京若菜朝臣

我のやに世に死したるも若菜朝臣の侍りし

返

らむ世に死したるも若菜朝臣の侍りし  
らむ世に死したるも若菜朝臣の侍りし  
ての又れ年郭とて侍りし

作概力

少下

この世に死したるも若菜朝臣の侍りし  
この世に死したるも若菜朝臣の侍りし

平定文

この世に死したるも若菜朝臣の侍りし  
この世に死したるも若菜朝臣の侍りし  
中納言兼捕りしとて侍りし

けりし

この世に死したるも若菜朝臣の侍りし  
この世に死したるも若菜朝臣の侍りし  
めりしとて侍りし

少下

少下

この世に死したるも若菜朝臣の侍りし

少下

いふ女悲ふの事とていひぬる事とて思はれ  
子ふり約き人乃ひらひまゆりくれ  
むとらひ舞あかりふけと人のさうい  
て約けし

少下

春も秋もみちとあそび立るるも木枝は  
むとあふをく運りて

中務

日

馬はくまゆりむねもふりかきとあそび  
むまこふをくれりて

日

うらあつこせぬ物ありきりしむはさか  
あはれ

少下

世中とていひてとていふあふん  
さひほのうらあかりてあまみけり  
人まら

万

川流のあふれこゆるは河瀬乃たのみ  
さぬき乃川もこれゆりて岩屋の中  
あかりとて

万

あふれよるつとあふれ枕とまてあふれ  
紀友則身ゆりふけりよあ  
けしゆ

あはれぬ我身とて今こそ是れをまはさふ人なるは道徳  
可い志もさる人のうせあるはよそあり  
後こそふりきた世中なるうせあるはなほひびき  
めれ志ふゆきほりひびきあり

人まら

家よきわらわとてこれにまられわらわよきけり  
まらぬれはこれにまらぬれはこれにまらぬれ  
いよよはゆきひきありゆきひきあり  
いよよはゆきひきありゆきひきあり  
世中なるわらわとてこれにまられわらわよきけり

けいこは忠朝にれりいよよまらつらけり  
このあひこやまひにりこあり

紀貫之

少雅下  
系統ふあよとて月影のわらわにこれ世にこれを

このあひこやまひにりこあり  
けいこは忠朝にれりいよよまらつらけり  
このあひこやまひにりこあり  
けいこは忠朝にれりいよよまらつらけり  
朱崔院うせれをゆきひきありありてを  
皇太后をまはれらるありありありあり  
てまらつて世に

御覧

笑竹のわらわとてこれにまられわらわよきけり



少佳下

むしらす

よも人不知

多岐山若小娘れりえあけらるるあきみはし我とてあん  
やまひして人おわくはくあり一年おれ人  
と雖もやふおとにをたかくゆらとんく

よけこまよ 大逆書長

みか人の命と病よたふうの弟しこもまきあふり

せれらうはきこひとひくよみゆけり

まいふ

弟枕人かあまらうひひははあるまらういぢふまら

むしらす

少孫満懐

少佳下

五

世中とゆふあうんおわけに死りあのかうとて

忠蓮南山乃房れ志よ死人とは師のみ

ゆくあさあうかこう死らうとカク

源相方朝臣

少佳下

契つまらうえのあれもあひわくと我とて誰うとらんすん

むしらす

よも人不知

少佳下

守れかまの種れ志よまもをいさあてうとてあ

は師ふらうむしらすけりけり時よあはらう

まきくゆけり

廣滋保流 大内記

う海とてむしらすまもをいさあてうとてあ

四

25111111

題不知

後人志す

日  
母中半此車のありせしむひのあやといそいそは  
は解ふふんといひつ時<sup>は</sup>あふりたれたく  
うういふそてゆき 友永高光

日  
母中ふつそとろあさ白雲此門いふえあつめとそく  
眼よゆけつはあひまりてゆき女れあまふ  
ありぬとそてつらけり

うーのふ

とみ深なるは我のこころいふと世とそいふをわ

返一 後人不知



とみ深の家とみこいふとそつらとそふとそあふそを

成信重家う出家一ゆけつとらた大并仍

ぬうりといひつらそを

右清門書云任

成信重家上右邊中  
童家後定信下右邊中  
嘉保三年正月  
三首家

とみとそいふありそ世中といつとつらとそいふとそあふ  
少納玄友原統理よ年とら娶つるゆき  
と志候ふと出家一ゆきとそていひつらそ  
は信やとそいふ風つらとらとそいふとそあふ  
女院河八幡捧物よとそとそとそとそとそ  
てよみゆき

女院

こゝにまきじ河の飛おれははるれまふあめあきり  
天曆河時麻さくらの文此山候せらるるん  
とてゆけりと交らせ行まけりやそその  
ゆゑとて河飄誦とてあせ給けりと記

御家

りあくと君ふと心ひらうおといはぬみらりまをきふはら  
為雅朝臣普門寺ふく雅信書しゆて又  
の目これあきりんととふりゆきうはめてよ  
小聖ふゆりてゆけりよ雅のれり強り  
くれし

春宮太女道徳母

少下

新ころころあつふははとよのえさうにくとさ舞  
た大將海時白河を流産せらるゆけりふ

實方御下

きふりの露の命をけりすそらとれ人の玉とあれ  
なきあひくゆけり人のくうとおわゆくれ  
ねさゆりそりきる新れ後よれりけり  
法師のつさねとあうてよみゆき

少下

物とともふりふあつ物とまゆりよとあむん  
性書字上上人なりとあまみつりきり

雅致女式部

教字ゆり

暗よりくさるるをいかにせしむるにせしめぬ月

極楽と祇園のくさるるにみゆけり

仙慶法師

極楽のくさるるにみゆけり

市門よかたつげのゆかり

宣也上人

天禄三年九月於東山西光寺

入滅

一度と南無阿彌陀佛と云ふ人乃ち此上とのけりぬ

光明皇后山階寺におの佛跡よたつをゆかり

とそらあまのふりぬるにこそあはるる昔人のあまのたれ

入僧正の基よみゆかりけり

法苑珠林のくさるるにみゆけり

りくさるるにみゆけり

南天竺より東大寺僧正よあひよ喜提

りくさるるにみゆけり

吳山の秋遊乃みゆけり

返一 娑羅門僧正

くさるるにみゆけり

聖法太子高皇太后道人の家よたつげり

よ鐵くさるるにみゆけり

のくさるるにみゆけり

きくうらほくしよりくくはそれしてしう  
さいふしんしんしんしんしんしんしんしんしんしん  
しんしんしんしんしんしんしんしんしんしんしんしん  
しんしんしんしんしんしんしんしんしんしんしんしん  
しんしんしんしんしんしんしんしんしんしんしんしん

しんしんしんしんしんしんしんしんしんしんしんしん  
しんしんしんしんしんしんしんしんしんしんしんしん  
しんしんしんしんしんしんしんしんしんしんしんしん  
しんしんしんしんしんしんしんしんしんしんしんしん  
しんしんしんしんしんしんしんしんしんしんしんしん

しんしんしんしんしんしんしんしんしんしんしんしん

しんしん

しんしんしんしんしんしんしんしんしんしんしんしん

しんしんしんしんしんしんしんしんしんしんしんしん

天福元年仲秋中旬以七旬有餘之盲目  
重以愚笨奉書之 八ヶ月終功

翌日讀合訖

此本付屬工平為相

魏齡六十八桑門融覺判

此集世々所傳音指證本仍以教多舊  
本校合校是取其要猶此音不審  
又第合抄之證本

抄前五百九十回首 上二百廿五首下二百五十九

其中

憲上

中納言師氏

心行不りり奉と志るをふとあつりのいふときり

或年音入後撰

部一らす

赤深忠

我々の松とるともりるをきり松むとふふらひ

以二首集不見奇也

五百九十二首集抄云相凌

拾遺抄奇

春 辛七

夏 辛二

秋 軍九

冬 辛二

賀 辛一

別 辛四

憲上 辛五

一首集不見或在本

忘下 辛五

一首集不見

雜上 夏二

雜下 八十六

以上五百九十四首

